

## 教育・保育要領、保育指針を考える（第4回）

### ■ 育みたい資質・能力

新要領・指針改訂の意味や目指すところとして、現在のような IT に代表される情報化社会に生きていく中で子どもたちが自らの人生を主体的に切り拓き、たくましく生きていくために、これまでのような行政区間管轄に縛られることなく、学校種、園種を越えて保育者が未就学の子どもたちに育んでいくべき力とはどういったものなのだろうか、という観点から新要領・指針の共通化が図られた。そのような中で幼児期のみには当てはまるのではなく、幼児期から始まり、小学校・中学校・高等学校と子どもたちが育っていく過程において一貫して育てていきたい大切な要素・能力として示されたのが下記の 3 つの柱にあらわされる資質・能力なのである。そしてこれら能力を獲得することで、子どもたちがよりよい社会を生きていくことができると考えるのである。

#### ◇ 育みたい資質・能力 三つの柱

##### 1) 何を知っているのか、何ができるか（知識や技能の基礎）

基本的な事柄の知識・技能を獲得してだけでなく、これまでに獲得した知識・技能との関係性を考えたり、気づいたり、理解したりすることで、それらを様々な場面で活用できるように可変させていく力も含まれる。要するにただ単に物事を暗記したりして知識を増やしていくことが優先されるのではなく、それらと並行して獲得したも

のからどんなことができるのか。どのように使いこなすことができるのか。ただ単なる知識獲得で終わるのではなく、得た知識をもとに行動に移し、使いこなすスキルが求められるのである。

##### 2) 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力などの基礎）

1) で獲得した知識や技能を使って、組み合わせたりなど創意工夫することで、様々な問題を発見したり、解決したりなど使いこなし、応用していくことができる力である。新しいアイデアは既存の概念をいかに組み合わせるのかということから生まれることが多い。つまり、常識という固定化された概念に縛られるのではなく、それら枠を取り払うことに加え、既存の概念を組み合わせたり、掛け合わせたりすることによってこれまで不可能とされてきたことも可能になることもあるだろう。そのような応用力・思考力などが求められてくるのである。

##### 3) どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性などの基礎）

1)、2) の資質能力をどのような方向性で働かせていくかを決定づける重要な要素であり、主体的に取り組む姿勢など学びに向かう力、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的にとらえる力などに加えて、リーダーシップやチームワーク、思いやりなど人との関わりやコミュニケーション力などが求められる。要するに、知識や能力があったとしてもそれらを活

用していくのは人間なのである。つまり人の心や気持ちはその行動をつかさどっていると言えるのである。そういった意味でも、知識や能力の獲得や育成に偏重することなく、子どもたちの心や人間性も並行してバランスよく育成していくことが大切なのであり、これら能力が子どもたちの資質能力を開花させるカギを握っているといっても過言ではない。

以上のように、これから私たちが想像しえない新しい時代に生きていく子どもたちに求められるこれら資質・能力を念頭に置いて、生涯にわたる人格形成の基礎と培うという幼児教育の特性に配慮しながら教育・保育の目標内容と指導方法などを検討していく必要があると考える。そうしていくことが、小学校・中学校・高等学校への教育に繋がっていくのであり、私たちはその中でも重要な基礎を担う教育を行うものであるという認識を今一度もち、教育・保育にあたっていく必要があるのではないだろうか。

（社会福祉法人大阪誠昭会 理事長 田中啓昭）

### ■ 幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿

資質・能力の 3 本の柱をより具体的にして、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の明確化ということで、目安としての 10 の姿があげられており、人間が生きていくための基礎育成時期と捉え、遊びの中から得た経験を幼児期の終わりに活かせるように表現されている。

「幼児期の終わりまで」の文言が評価、到達度という誤解を招きやすいが、知識や能力ではなく、どのような経験をしているかという振り返りの視

点で見る必要がある。遊びや生活の中で子ども自身の興味、関心が育っているかであって、改定前の要領、指針のなかに組み込まれていたものを、より分かりやすく示したものであることを理解する必要がある。

幼児期の終わり、つまり卒園入学時期を指しているが、それまでに子どもが豊かな経験によってどんな力をつけてきたのか、育ってきたのかの内容を、小学校に伝えるツールとして分類されて、より可視化に対応するために 10 の分かりやすいポイントで子どもの育ちを表現したということである。

幼児教育施設から小学校へのスロープ状の接続をするために、保育者と小学校教諭の双方に通じ合う言葉を使って作られている。また幼児期の基礎育成時期に行なう経験を積むための遊びの活動の根幹としても捉えることができる。

幼児教育施設も小学校の準備教育ではなく、幼児期の育ちや学びの情報を正確に小学校以降にもつなげていこうという考えのもと、幼児期にはこのように育ってきた、学んできた、経験してきたということを、子どもたちが遊びと生活の中で体験、成長したことを伝え、それを踏まえた教育を小学校の最初に生かしてもらいたいという意味での姿といえる。

10 の姿は「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている園児の卒園時の具体的な姿であり、保育者が指導を行う際に考慮するものである。」とあるように、すべて 5 領域をふまえてのものであるので、それぞれの領域の発達、発育、発展する姿を想定し、46 細目をも念頭に置き、さらに保育者のねらいや願いをこめて取り組むことが望ましい。例えば 10 の姿の 1 番目「健康な心と体」の説明文を読んでも、乳児期の 3 つの視点→満 1 歳から満 3 歳までの 5 領